



子どもの育ちと安全がわかる！ 子育て安心カード

園内研修資料



氏名

社会福祉法人 日本保育協会



CONTENTS

- はじめに
- 子どもの死傷事故を防ごう!! …… 3
- 〈子育て安心カード〉の内容と使い方 …… 4
- 〈子育て安心カード〉解説 …… 5～8
- 保育者の専門性を発揮して …… 9
- 〈子育て安心カード〉活用Q&A …… 10～11
- 保育者の実感、保護者の感想 …… 12～13
- 保育所と家庭で起きる事故の違い …… 14～15



2 子どもの死傷事故を防ごう!!

死傷事故は予防できる

「傷害（ケガ）」「溺れ」「やけど」などは、日々、多くの子どもたちの命を脅かしています。信じられないことに、長年、「**不慮の事故**」は**日本の子どもの死因の第1位**を占め続けているのです（P14～15参照）。にもかかわらず、「子どものケガを予防しよう!」と呼びかけると、「ちょっとしたすり傷や切り傷もダメ?」「安全にしすぎたら、子どもの（運動）能力が育たない!!」という声が返ってくる場合があります。

深刻な事故によって命を落とす子ども、大ケガを負う子ども、脳障害等の後遺症に苦しむ子どもを、なんとしてもなくしたいとは思いませんか。実際にヨーロッパの「傷害予防先進国」の多くが取り組んでいるように、社会全体の努力で、環境や製品に潜む「危険性」をなくしていくことで、多くの**死傷事故は予防することができる**のです。

過小評価しがちなリスク

保育所は、「子どものためにつくられた、安心・安全な施設」であるはずですが、**危険な箇所は、実はあちこちに潜んでいます**。一方、保育者の多くは、子どもたちのヒヤリハットを日々目にしているにもかかわらず、重大なケガはめったに起こらないことから「大丈夫にちがいない」という傾向にあります。ですが、**ケガのリスクを過小評価するのはとても危険**です。特に、頭を強く打つ（転倒、転落）、顔や目のまわりを傷つける（転倒、鋭利な物）、小物や食べ物、寝具・家具などでの窒息、溺れ（手洗い場やバケツに溜まっている数センチの深さの水でも）、洗剤や薬などの誤飲は、死亡や重症、後遺症につながりかねません。

こうした危険については、「**万が一、誰も見ていなかったとしても、重大なケガが起こらない**」**対策**をすべきです。命や将来にかかわるケガにつながる“要因”をできるだけ減らし、「ここは、子どもたちにとって安全な場所です!」といえるようになれば、保育者も保護者も安心して子どもたちを元気いっぱい遊ばせることができます。そうやってこそ、「ちょっとしたすり傷や切り傷」は、成長・発達に伴う“元気の勲章”ともいえるようになるでしょう。



1 はじめに

〈子育て安心カード〉は、子どもたちの傷害事故を防ぎたい! 子どもたちの命を守りたい!! と願う、保育者と保護者のためのカードです。同時に、保育者と保護者が、子どもをまん中に、互いによりよく関わり合っていくためのコミュニケーション・ツールです。子ども一人ひとりの成長の節目に添って、保護者に一枚ずついねいに手渡されていくカードには、その時期ならではの育ちの様子とその時期だからこそ考えたいケガ防止の手立てなどが盛り込まれています。

この「〈子育て安心カード〉園内研修資料」は、保育者が、〈子育て安心カード〉の活用のしかたを考えつつ、子どもの成長発達と、その成長に伴って発生しかねない傷害（致死）の予防の仕方を学ぶ資料です。

「カード」と「資料」、両方を存分に活用してください。そして、園内や家庭内に留まらず、子どもたちの生育環境全体から、死傷に至るような事故をぜひとも減らしていきましょう。



3 〈子育て安心カード〉の内容と使い方

構成

1 ●見開きカード

新入園の際に、「表紙」に子どもの名前を書き、2枚（8P分）とも保護者に渡します。その際に、この園内研修資料にまとめられている「子育て安心カード」の取り組みについておおよそ伝えましょう。

- 「子育て安心カード」とは？…カードの説明と、保護者への呼びかけが記されています。
- 「子どもの命と未来を守る！10か条」…ぜひとも心しておきたいポイントです。
- 「〈発達をめやす〉と〈起こりやすい事故〉早見シート」…0歳～5歳過ぎまでの、子どもの成長発達の様子と、それに伴って発生しやすい事故が一覧表にまとめられています。
- 「相談窓口・緊急連絡先」…冷蔵庫など家庭内のすぐ見える場所にぜひとも貼っておいてほしいページです。
- 「子育て安心カード〈活用のヒント〉」…保護者がカードを受け取った後の活用法のアイデア集です。

2 ●一枚ずつのカード（全部で11枚）

「①寝返りをする時期」、「②はいはいする時期」…など、成長に添った内容のカードを、その時期を迎える子どもの保護者に、その時期ごとに一枚ずつ手渡していきます。その際、裏面下の自由記述欄に、日々成長を見守っている保育者ならではのひと言を添えて、保育者のまなざしを保護者にぜひ伝えていきましょう。各カードの内容については、P5～P8（次頁以降）を参照してください。

3 ●「セットケース」「カード手渡しチェック表」

両方とも、「保育所保管用」です（注：保護者には渡しません）。「セットケース」には、順に手渡ししていく「カード」を収めておきます。そして、手渡すたびに「カードチェック表」に「渡した日」「担当者」を、また、裏面には申し送り事項を記しておきます。最も長期間の場合は、0歳～6歳の6年間にわたり手渡し続けていくことになりますから、担任が替わるなどの場合も、この取り組みがスムーズに受け継がれていくためにぜひ活用してください。



4 「子育て安心カード」解説



発達カード① ○○○○が、寝返りをする時期です。

手渡す時期の目安：「0歳児クラス」…おおむね4ヶ月～6ヶ月

- 保護者に向けて…
- この時期の子どもは、「自分で自分の身を守ることができない」ことを伝えましょう。
- 子どもの周囲に窒息や誤飲、やけどの危険になりそうなものを置かないように伝えましょう。
- 目を離す時は、囲いのあるベッドなどの中に必ず寝かせるように伝えましょう。

この時期の子どもは、「自分で自分の身を守ることができない」という点がポイントです。ですが、じっと寝ているわけではなく、手に握ったものを口に入れたり、寝返りをしながら移動していきたりと、さまざまな行動をします。「寝返りの始まり＝子どもがじっとしていなくなる」という点を、保護者に伝えましょう。子どもの周囲に窒息や誤飲、やけどの原因になりそうなものを置かない、目を離す時は、囲いのあるベッドに寝かせるなど、環境全体への配慮を伝えましょう。

発達カード② ○○○○が、はいはいする時期です。

手渡す時期の目安：「0歳児クラス」…おおむね6ヶ月～7ヶ月

- 保護者に向けて…
- はいはいを始めると、行動範囲が急に広がることを伝えましょう。
- なんでも口に入れてみたがる時期ですので、口に入りそうなものは手の届かない所にしまうように伝えましょう。
- 保育所の環境を紹介しながら、「柵」や「囲い」の活用法も示していきましょう。

はいはいが始まると、一気に生活空間が広がります。いろいろなものを口に入れる時期でもあります。この点を特に強調して伝えましょう。保護者は、「さほど動かないだろう」と子どもの活動を過小評価しがちです。また、時には子どもに言い聞かせようとする姿も見られますが、この時期の子どもに「ダメ」と言っても行動は変えられないことを伝え、保育所では安全な範囲の中で子どもを遊ばせていること、その環境には、子どもが飲み込んでしまうような物は置いていないことなどを話しながら、家庭でも柵や囲いを効果的に使うように伝えてください。

発達カード③ ○○○○が、歩き始める時期です。

手渡す時期の目安：「1歳児クラス」…おおむね10ヶ月～12ヶ月

- 保護者に向けて…
- 歩き始めると転倒や転落が増えること。その予防策として、効果的なクッション材の付け方などを、保育所での実践例を添えて伝えましょう。
- 戸棚を開けて洗剤などを口に含んだりしないよう、「チャイルドロック」の紹介もぜひ。
- 保育所で行っている水まわりの安全対策の実例を伝えましょう。



つかまり立ちをし、不安定ながら歩き始め、階段の昇り降りもし始めます。この時期の子どもは一日ごとにできることが増え、「～してみたい!」という強い思いを抱き、行動範囲が広がっていくということをはっきり伝えてください。一方、折に触れて、「〇〇ちゃんは、今日、～をしたんですよ」と伝え、子どもが着実に成長変化していること、それをきちんと観察している保育所の取り組み、そして、溺れ・やけど・転落などを防ぐような家庭での安全対策のコツを知らせてください。

発達カード④ ○○○○が、「かみつき」などを始めることも、また、されることもある時期です。

手渡す時期の目安：「1歳児クラス」…おおむね1歳1ヶ月～

● 保護者に向けて

- 成長著しく、「したいけど、できない」イライラが募ることもある時期だと伝えましょう。
- 「かみつき」は、“深い関心の表れ”であるケースもあることを伝えましょう。
- 「かみつき」が起こった際には、クラスの子ども全体的様子を見守りながら再発を防ぐ保育所の姿勢を伝えましょう。



自分自身のことや自分がしたことを十分に認めてもらっている子どもは「かみつき」や「ひっかき」はあまりしないといわれています。保育者は、子ども同士の関わり方に配慮していることを保護者に伝えながら、家庭での様子にもていねいに耳を傾けていきましょう。また、子どもの「～したい!」という思いは、表現・表出で満足感を得られることが多くあるものです。「関わり合いたい」「伝えたい（わかって欲しい）」、子どもがそういった思いを豊かに表現していけるためにも、子どもと日常的におしゃべり（対話）を楽しんでいけるよう保護者にも伝えましょう。

発達カード⑤ ○○○○の、行動範囲が広がる時期です。

手渡す時期の目安：「1歳児クラス」…おおむね1歳7ヶ月～

● 保護者に向けて

- 特に、この時期の子どもの行動は予測できないものと伝えましょう。
- 自転車に乗せる時には、必ず、ヘルメットをかぶらせるように伝えましょう。
- 子どもは近隣の方々とおつきあいからも成長していくこと、社会の中で育ち始める時期であることも伝えましょう。



保護者が、元気いっぱい動き回る子どもに手を焼き始める頃でもあります。また、自転車・自動車に関わる死傷事故も起こり始める頃です。大荷物載せている際の「自転車の乗り降りの注意」など、ていねいに伝えましょう。また、外出の際には子どもの手を離さないようにと伝えつつ、同時に、子育てを一人でがんばることなく、子どもを見守ってくれる近隣の方々とおつきあいを大切にしたいことや、子どもの成長発達について困った時はいつでも保育者に相談して欲しいことなども伝えましょう。

発達カード⑥ ○○○○が、「いやいや!」をし始める時期です。

手渡す目安：「2歳児クラス」…おおむね2歳～

● 保護者に向けて

- はっきりと自己主張し始める時期で、「いやいや!」や「(何でも)自分で! (するの!!)」は、その気持ちの表れのひとつであることを伝えましょう。
- 子ども自身が選択する、子ども自身が主人公であるという実感を味わえると、子どもは満たされた気持ちになることも伝えましょう。
- 同時に、社会のルールはルールとしてしっかり教える必要があることも伝えましょう。



動き回り、駄々をこねるわが子に、保護者が疲れを覚えることもあります。こういう時こそ、保育者は、保護者の気持ちを受けとめつつ、この時期の子どもの心の成長について、穏やかに保護者の自尊心を傷つけないように伝えてみましょう。成長発達についての理解が進むと、ゆったりとした気持ちで子どもに接することができ、毎日の子育てを楽しめるようになっていくことでしょう。

発達カード⑦ ○○○○の活動が、ぐんぐん活発になり始める時期です。

手渡す目安時期：「2歳児クラス」…おおむね2歳～

● 保護者に向けて

- 通園バッグを肩掛けにしたり、ヘルメットを着用したりしたまま公園で遊ばないように伝えましょう。窒息事故の予防策のひとつです。
- 遊具（すべり台）などから子どもが落下した時、その落下速度に大人は手の出しようがないことを伝え、大人の見守り方、子どもたちの遊び方に注意するよう伝えましょう。
- 子どもが思いきり安全に駆け回れるように、歩行・走行を十分に支える靴を選ぶように伝えましょう。



すべり台やブランコなどの遊具で遊ぶ時の安全対策については、保護者会や懇談会などの時にも保護者に説明してください。その際に、「私たちの保育所では、外遊び・公園遊びの時の安全確保にこのように取り組んでいます」と、具体的な取り組み方法を伝えることで、保護者の安全対策への理解が進みますし、そうした安全対策を講じている保育所への信頼感も深まっていきます。

発達カード⑧ ○○○○の、手先がどんどん器用になる時期です。

手渡す時期の目安：「3歳児クラス」…おおむね3歳3ヶ月～

● 保護者に向けて

- ハサミやナイフは、大人がそばについて、使い方を覚えつつ、危険性も学んでいくように伝えましょう。
- 自動車に乗る際は、必ず、チャイルドシートを着用するように伝えましょう。



安全について子どもにきちんと教える必要がある時期です。ハサミの使い方などについては、保育者が言葉で説明し実際の使い方を見せ、友達同士で確認しあいながら安全に使えるようになっていくように努めます。

ていく様子を保護者に伝えましょう。また、子どもが危ういことをしそうになっている時には、「ダメ!」と叱るだけでなく、大人が手本を示しながら危険や安全について教える時期でもあることを伝えましょう。一方、自転車・自動車事故が多くなる時期でもあります。自転車用ヘルメットやチャイルドシートの着用は必須であることも伝えていきましょう。

発達カード⑨ ○○○○が、友達と活発に遊び始める時期です。

手渡す時期の目安:「3歳児クラス」…進級時に

●保護者に向けて……………

- 危ない道具（マッチ、ライター、刃物類）は、絶対に子どもの手が届かない所に置いておくよう伝えましょう。
- 子ども同士で遊んでいる時に、危険なものや道具が使われていないかチェックするよう伝えましょう。
- プールや水遊びなどの時には、おとなは子どもに手が届くところにいること、また、絶対に目を離さないことを伝えましょう。



いよいよ3歳児クラス、「幼児クラス」に進級です。「子どもを守る」ことと同時に、「子どもに安全を教える、子ども自身が危険を理解していく」時期でもあります。花火も、プールや海・川での遊びも安全対策をとりながら楽しみつづ、一方で、子どもが自分自身で安全を考えられるよう教えていきましょう。「～しちゃダメ」「～しちゃ危ないでしょ」と子どもに口で説明するだけでなく、子ども自身が安全について考えて行動できるようになっていくような、子どもの自立を支える保育所の取り組みを伝える機会であるともいえるでしょう。

発達カード⑩ ○○○○が、いろいろチャレンジし始める時期です。

手渡す時期の目安:「4歳児クラス」…進級時に

●保護者に向けて……………

- 自転車に一人で乗り始めたら、必ずヘルメットを着用！子どもの頭部を守るために着用させることは、保護者の義務であることをていねいに伝えましょう。
- 大人用自転車後部の「子ども用シート」に子どもが乗る時には、足が車輪に巻き込まれるようなことがないように伝えましょう。
- 自動車乗車時の「チャイルドシート」着用は保護者の義務であること、また、体が大きくなってきたら「ジュニアシート」を用いてシートベルトを着用するよう伝えましょう。



仲間同士存分に遊ぶ場で、自分で考え、想像し、判断していく力が徐々についてきます。好奇心が旺盛になり新しいことに挑戦したくなったり、その一方で、ぬいぐるみのような何気ないものを愛しみ、成長していく際の心の支えとしたりもします。日常生活の中での安全については、おとなが手本を見せながらていねいに説明し、子ども自身の理解を促していきましょう。そのような保育所の子どもへの関わりを保護者にも伝え、家庭との連携をさらに図りたい時期でもあります。

発達カード⑪ ○○○○が、自分で考え、意欲的に行動し始める時期です。

手渡す時期の目安:「5歳児クラス」…進級時に

●保護者に向けて……………

- 全身運動が滑らかになり走ったり跳んだりを楽しめるようになることから、時には、深刻な事態に至る事故（鉄棒からの落下や子ども同士の衝突など）が起こることもあると伝えましょう。
- 室内を駆け回り、電気ケトルを倒してやけどを負うなどの事故も起こります。極力安全な室内環境を工夫していくように伝えましょう。
- ルールのある遊びを楽しめるようになる一方、友達とのトラブルを仲間同士で解決しようとするような心の成長も見られる時期であることを伝えましょう。



園内で一番のお兄さん・お姉さんとなり、心もからだもさらに成長著しくなる頃です。基本的な生活習慣が身についてきて、持ち物の管理・整理整頓などでもできるようになり、保育所内では、ほぼ自立した園生活が送れている様子なども、折々保護者に伝えていきましょう。また、語彙数が増え、おしゃべりを楽しめるようになり、数への興味関心なども高まり始めることも保護者に伝えていきましょう。保育者と保護者が共に手を携えている園環境の中で育った子どもたちは、卒園～小学校入学という節目のステップをたくましく乗り越えていくことでしょう。

5 保育者の専門性を発揮して

子どもたちは、日々めざましく成長発達していきますが、それゆえに、その発達途上には思わぬ事故を招く危険が潜んでいるともいえるでしょう。保育所は、子どもの発達を理解し、心身の成長を支えることはもちろん、子どもの「安全」や「ケガ予防」に関しても“情報・知見の宝庫”です。保育者のみなさんは、ケガ予防の知恵や対策を、ぜひ、保護者に伝えてください。

子どもたち一人ひとりの発達に合わせて〈子育て安心カード〉を保護者に手渡す、その時こそ、保育者の専門性を発揮してください。「○○ちゃんは、こういう時期だから、こういうケガにお互いに注意していきましょう」というようなやりとりは、家庭でのケガ予防に役立つことはもちろん、保育所に対する保護者の信頼感を向上させることにもつながります。

そして、保育者のみなさんは、今回の〈子育て安心カード〉の取り組みスタートを機に、園内の子どもたち一人ひとりの発達を見つめ直してみたいかがででしょうか。子どもの発達が理解できてこそ、このカードを十分に活用でき、子どもがケガを負わないような環境づくりなどを具体的に意識することができるようでしょう。



6 〈子育て安心カード〉活用 Q&A

園内で職員相互の共通理解を深めていくために…

Q1 〈子育て安心カード〉の取り組みについて、 どのような園内研修をしたらいいのでしょうか。

A まず、園内の職員全員で、「〈子育て安心カード〉」および、この「園内研修資料」を読み、概要を把握してください。その後、「〈子育て安心カード〉園内研修用 DVD（動画）」（平成26年度中に作成予定）を視聴し、理解を深めていくことをお勧めします。

また、園内研修は、〈子育て安心カード〉の取り組み前に行うことに加え、取り組み始めた後にも、職員の実感や保護者からの声などをもとに振り返り、よりよい取り組みのありかたを考え合う機会を設けていきましょう。

Q2 園児の人数分の〈子育て安心カード〉を保管し、一人ひとり、ふさわしい時期に手渡していくのは、どのクラスもなかなかたいへんなのですが…。

A ひとつのアイデアですが、たとえば、クラスの人数分の〈子育て安心カード〉が、まとめて収納できるような箱形ケースなどをご用意ください。そこに、それぞれの子どもたちの名前が見えるように、〈子育て安心カード〉を立てて収納します。そして、クラス全体の子どもたちの成長の様子を見守りつつ、折々、一人ひとりにもっともふさわしい時期に手渡せるよう、一人分の「カードケース」ごとに順を入れ替えておきましょう。この作業は、子どもたち一人ひとりの育ちの確認にもなりますね。

そのようにして、一番手前に並んでいる子どもにすぐ手渡せるようにしておくと、クラスの全園児分のカードから探し出すようなこともなく、カードを手渡すことができます。

Q3 全職員が、保護者にカードの内容をしっかりと伝えられるかどうか不安です。 職員によって伝え方が違ってしまつと、 保護者の受けとめ方も変わってしまうのではないのでしょうか。

A 〈子育て安心カード〉の取り組みに限らず、職員集団は、常にさまざまな情報を共有したいもの。〈子育て安心カード〉を手渡した時に、「その保護者とどのような話をしたのか」などについて園内で伝え合っておくと他の保護者に手渡す時の参考にもなるでしょう。また、もしも、否定的な受けとめ方をされたような場合には、その反応から保育者が気づく家庭の事情などがあるかもしれません。あるいは、保育者自身が、自分のコミュニケーションの課題に気づくこともあるかもしれません。

さらには、職員全員での話し合いの場をもつ時間がなかなかとれない場合は、気づいたことを互いに共有できるような「子育て安心カード〈ノート〉」などのようなかんたんな記録を記していくこともひとつのアイデアかもしれません。

Q4 この Q&A に記載されていないことで困っているのですが、 どうしたらよいのでしょうか。

A 「困っていること」の内容次第で相談先はさまざまですが、カードの扱い方そのものについてでしたら、ぜひとも、職員同士で話し合う場をもってください。そうしてこそ、この〈子育て安心カード〉の実践を、一人ひとりの担任保育者だけが担うのではなく、保育所の職員集団全体で取り組んでいくことができるでしょう。

保護者と相互理解を深めていくために…

Q5 保育者からの「コメント欄」には、 何をどのように書けばいいのでしょうか。

A この「コメント欄」は、そのお子さんの発達の評価を記す箇所ではありません。「何ができた」「これははまだできません」というような報告ではなく、園内でのそのお子さんの「とっておき！」のシーンや、ぐっと成長が感じられた姿など、保育中の一場面を書いてみてはどうでしょうか。保護者は、そのひと言に、わが子を日々見守り続けてくれている保育者の温かいまなざしを感じとるにちがいありません。

Q6 カードは必ず一人ひとり手渡しした方がいいのでしょうか。 保護者会などの際に、一斉配布してはいけませんか。

A 保護者一斉配布ではなく、ぜひとも、一人ひとりに手渡してください。子どもの成長は、一人ひとり違います。その子にとってもっともふさわしい時に、ふさわしい時期のカード（カード①～カード⑪）をさしあげてください。また、一人ひとり手渡す際の言葉のやりとりは、保護者が自分の子どもを理解する助けとなり、園と共に子どもを育てていく意識を育んでいくことにもなります。

Q7 「園だより」さえなかなか読んでいただけない保護者の方に、どのように したら「子育て安心カード」について関心をもってもらえるのでしょうか。

A 「子育て安心カード」は、「園だより」とは異なり、もっともふさわしい時期に、一人ひとりに手渡していくカードです。手渡すたびに、「その時、自分だけに渡してくれた」ことから、その保護者の関心を引き寄せることになるのです。その上、「保育者が手書きでメッセージを添えて渡してくれた」ということは、保護者にとっては、わが子だけに向けた保育者の愛のメッセージといえるでしょう。それが繰り返されるうちに、「次のカードはいつもらえるかな…」と保護者の方も楽しみにし始めるにちがいありません。

Q8 「他の子どもがもらっているのに、ウチはまだもらえないの!？」と 言われました。発達に遅れのある子どもや気になる子、 支援が必要な子への配慮はどうすればよいのでしょうか。

A このカードをきっかけにした保護者の発信は、ぜひともプラスにとらえてください。子どもの発達は、一人ひとりのペースがあるものですが、もしかしたらその保護者はわが子の成長ぶりについて悩んでいるのかもしれない。声を掛けてきた保護者の気持ちを受けとめ、必要に応じて面談の時間を設けるなど個別の対応を考えてみましょう。そして、本当にその子の発達が気になる場合には、専門機関と連携をとるなどして他の専門職の力も得ながら成長を見守っていくようにしましょう。



7 保育者の実感、保護者の感想——実施園のアンケート結果より

保育者の実感

園長より…

《保育士にとっての学び》

- 職員（保育士）たちのプロ意識が高まった
- 新人保育士の勉強になり、今後も役立つ
- ヒヤリハットを職員会議の第一議題とすることにした
- 安全管理の意識が高まった
- 0 歳児は成長のポイントがわかりやすく、保育士がタイミングを逃すことなく渡せている
- 1 歳児担当の保育士は、今まで以上に子どもたちの様子に注意を払うようになり、ケガが少なくなったと言っている
- 1、2 歳児については、発達の再認識になっている
- 職員間の連携がとれるようになった
- 危険察知を意識するようになった
- 人的環境を整えて、職員全員で子どもを守る意識をもつ機会となった

《保護者の反応》

- 年齢ごとの発達目安がよくわかり、大変参考になるという意見が多かった
- 第一子の保護者に喜ばれている
- 0 歳児の保護者には特に効果的
- 説明を聞いて、保育士に質問する方がいるなど、初めて子育てをする保護者にとっては、特に保育士とのコミュニケーションが密になり、育児支援の取り組みとなった
- 伝えることで保護者が考えるきっかけづくりになっている
- 家での様子や、子ども以外の家族の話題も聞くことができるようになった
- 口頭の話だけでなく、カードのイラストなどによって視覚で訴えることができた
- 子どもの発達、育児のポイント、ケガの予防につなげていっている

主任保育士より…

《保育士にとっての学び》

- 安全管理の意識が高まった
- 若い保育士には保護者と話す良いきっかけになっている

- 特に乳児クラスで、その子の発達についての観察がよくなるようになった
- 発育に対する意識が高まった
- 若い保育士が保護者に繰り返し伝えることで、自分自身も子どもの発達をよりていねいに意識するようになっている
- 小さいことでも気がつく、報告・対応する力が育ってきた

《保護者の反応》

- ヒヤリハットに興味を示していた
- 低年齢の保護者の方が、この取り組みについての話をよく聞いていた
- 担当（担任）保育士が渡すと、保護者の反応が良い

担任保育士より…

《カード・コメント欄の書き方の工夫》

- 一人ひとりの現在の成長・発達をふまえて、その子に対してのアドバイスのひと言も付け加えるようにしている
- 卒園間近に就学に向けてひと言を綴り、とても喜ばれた
- その時の子どもの様子や「できるようになったこと」「がんばっていること」を記入して渡している
- 子どもたちのつぶやきや友達との関わりなどを伝えている
- 子どもたちの様子について、手紙を書いている感覚で書ける
- 発達に合わせて、園ではこんなことができるようになった、こんな遊びが好きですというように、具体的に伝えている
- 保育園生活ならではの姿を伝えられている

《保育士にとっての学び》

- 子どもをよく見るようになった
- 発達の段階で気をつけたいポイントがよくわかった
- 発達の見通しがついてくる
- 保護者に対して、どのような意図でカードを渡しているかが伝わるように意識した
- 渡すタイミングをとらえ、その時の子どもに近い姿の時に渡していたが、それよりも“一歩早い時期”に渡す方がよい
- 子どもたちの姿が保護者に伝わるように、具体的に話すよう心がけた
- 子どもの新たな課題や目標が見通しやすくなった

- 一人ひとりをよく観察し、今、何に興味、関心があるのかがよくわかった。また、安全面の注意するところに気をつけるようになった
- 一人ひとりの危険を感じる行動や特徴を見つめることで、特にその場面で気をつけて保育し、ケガをすることがなくなった。保育園でのケガの件数が減ってきて、役立ったと思う
- 発達について自分自身も、さらに勉強しなくてはいけないと思った
- 子どもたちの観察、メモなどをとるようになった
- 成長の節目や目安という点で、改めて子どもの成長を見直したり、今後の援助や関わりのポイントが具体的に見えてくる
- 子どもへの対応がむずかしいと思われるような保護者には、その後のフォローも大事
- 自分で書いてみることで、改めて「自分も気をつけなければ」という意識が強くなった
- 時期にあった内容が書かれているので、渡す側はその子のことをよく知っておかないといけない、改めて感じた

《保護者はどのように生かせたか》

- 興味をもって受け取るうとする保護者がいる。担任と話したいと思っている保護者にとっては、このカードを渡すことがきっかけとなっているいと質問をしてくる
- 「こんなカードがあるんですね」「こんなことに気をつけるんですね」などの保護者からの言葉が聞かれた
- 0 歳クラスで初めてのお子さんをもつ親からは、「ありがたい」「こんなことあるんやねー」といった感謝の言葉をもらったり、これからの育ちについてなどがわかりやすくてよいといわれた
- 渡したカードの内容や子どもの姿を伝え、家での様子や「家庭でもこうです」などいろいろ話してくれた
- カードをきっかけに家庭での様子や、困っていることなど、話してくれる姿もある
- 初めて子育てをする保護者の方がほとんどなので、月齢よっての発達がひと目でわかり、またそれに合わせた危険な面などもわかる
- その時期での運動機能や注意事項が書いてあるので、保護者から「助かります」といった声が多くあがっている
- 家庭とは違った保育園の様子を知り、びっくりされている方もいた。家庭でも大切にしておいてくれているようで、成長や危険なども確認できるといっていただけた

保護者の感想

〈子育て安心カード〉の取り組みをスタートさせてから…

- カードを読んだ人は、96.5%
- カードを保存した人は 90%
- どうしたかわからない人が 9%。捨てた人が 1%
- 保存した人のうち、84%＝今後も活用する
- 保存するのは、「子どもの成長記録のため」「思い出」という理由
- 活用しない人が 16%いるが、主たる理由は、該当の月齢・年齢を過ぎたため
- カード保存場所は、家具（本棚・机・引き出し）26%、連絡帳 20%、ファイル関係 15%、箱・ケース関係 11%、冷蔵庫周辺 9%

〈子育て安心カード〉を読んで、「変えたこと」「したこと」は…

- 「発達のめやす」と「起こりやすい事故」を見て、危ない物や注意すべきことを再確認できました
- あたたかい飲み物をテーブルの上に置く時は誰かが周囲を見守っています
- ガードをつけました
- かかりつけ医の電話番号を記入しました
- 気をつけることが詳しく書いてあるので参考にした。本人のやる気を大切にしていあげようと思いました
- 誤飲しそうなものを近くに置かないようにした。寝返りの時は、ソファに一人でおかないようにしました
- 子どもにビニール袋を渡すと危ないということをカードで知って、使わせないようにしています
- 子どもの成長の過程をよく知ることができる資料として参考にするとともに子どもの好奇心を否定しないように心がけています
- 子どもの手の届く所に危ない物がないよう片付けるようにしています
- 自転車に乗る時にヘルメットをかぶるようになりました
- 高い所に登って遊ぼうとする時、危険がないように近くにいて、随時補助をするなどしています
- 外に行った時は特に目を離さないようにしています
- その時期に応じた家の中での事故など、防止する対策ができました
- 初めての子どもなので、時期的に行動することや見直すことがあり参考になりました
- 部屋の中の物の配置を変え、手が届くようになった所に危ない物を置かないようにしました

8 保育所と家庭で起きる事故の違い

1. 保育所での事故の実態

わが国の乳幼児死亡率は国際的に見ても低い値であり、乳幼児に対する保健医療等が非常に高い水準にあることを示しています¹⁾。一方で、死亡原因のひとつである「不慮の事故」の割合が1歳～14歳で第1位を占めており、「不慮の事故」は子どもの生命や健康を脅かす重要な問題といえます。

保育所で発生する事故の実態については、平成21年12月に厚生労働省が「保育施設における死亡事故事例について」として、平成16年4月から平成21年11月までの6年間に発生した保育施設（認可保育所、認可外保育施設）における死亡事例を分類発表しました²⁾。この報告書では、6年間で49件（52名）の死亡事例が報告され、うち19件（19名）が認可保育所で発生していました。認可保育所で発生した事例の年齢構成では0歳児、1歳児、2歳児がそれぞれ約2割と多く（表1）、発生場所においては13件（68.4%）が園内で発生していました。

さらに、平成25年1月に厚生労働省がまとめた「保育施設における事故報告集計」では、平成24年1月1日から12月31日までの1年間で、保育施設で145件の事故が報告されています（平成23年は89件）。報告された145件のうち、18件がSIDS（乳幼児突然死症候群）の疑いによるものや団子を喉に詰まらせる、プールでの溺水による死亡事例（認可保育施設=6件、認可外保育施設=12件）でした。なお、18件の死亡事例のうち17件が園内（室内=16件、室外=1件）で発生していました²⁾。

表1. 保育施設における死亡事故事例の子どもの年齢

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	計
認可保育所	4名	4名	4名	2名	2名	1名	2名	19名
認可外保育施設	19名	9名	1名	1名	1名	2名	0名	33名

出典：厚生労働省「保育施設における死亡事故事例について」2009年

家庭と保育所などの集団保育施設での事故発生率を比較した場合、事故発生率は家庭の方が高いとする研究結果が多く、保育所での事故は家庭での事故発生率の1/3から1/5程度という報告もあります^{4)～7)}。しかし、これらの研究や分析の対象となる事故事例は、死亡あるいは医療機関受診事例が中心であり、医療機関の受診を必要としない事例は含まれていません。多くの保育所では家庭にはあまり存在しないブランコや滑り台などの大型遊具を備えていることが多く、加えて、子どもたちも集団で様々な活動を行っているため、厚生労働省による報告等の事故の背景には、数百件あるいは数千件におよぶ軽度もしくは中程度の事故事例が存在することが推測されます。

2. 保育所と家庭で起きる事故の違い

保育所でも家庭でも子どもが生活をしている以上、常に事故に遭遇するリスクを抱えています。しかし前述のように、多くの研究では保育所などの集団保育施設は家庭よりも事故発生リスクが低いと示唆されています。つまり、子どもが過ごす時間当たりで比較した時、家庭で保護者に保育されているよりも保育所などの集団保育施設で保育士によって保育される方が、事故発生率が低いことを意味します。さらに、事故の内容についても誤飲は保育所では家庭と比較して著しく低い等の違いが確認されており（表2）、窒息や熱傷も保育所の方が少ないとする報告もあります⁸⁾。

保育所と家庭で発生する事故の違いが生じる要因として、以下のことが推測されます。第一は、保育所と家庭の環境の違いです。家庭や一般社会の中では、主として大人を想定して様々な構造物が設計・設置

されています。一方、保育所では子どもが楽しく遊び、健全な発育発達を行える場所であることを前提としていることから、子どもを中心に環境が整備されています。具体的には、子どもの成長発達の過程に応じた椅子やテーブルなどの家具をはじめとして、各所に子どもの快適性や安全性が確保されています。また、遊具も年齢に応じたものが用意されており、特に乳児については誤飲を招かない大きさのおもちゃを使用し、ボタンや硬貨などの小さなものも子どもの身近に置かないことが徹底されるなど、子どもの安全を確保するための環境づくりに配慮されています。

第二に、子どもを見守る者の意識や見守り方の違いが考えられます。家庭では保護者が家事をしながら保育をしていることが想像されるのに対し、保育所では保育士の目は主に子どもに向けられています。児童福祉施設最低基準において年齢が低い子どもほど多くの保育士が配置されていることから、子どもに目が行き届く分だけ事故の発生を減少させている可能性があります。保育所で保育士の目がより意識的に子どもに向けられる背景には、家庭と保育所での事故に対する責任問題の違いも考えられます。家庭ではさほど大きな問題にならない事故でも、発生場所が保育所であることにより責任問題が発生します。近年の保護者の権利意識の高揚と相まって、保育所の危機管理意識も向上していることが保育所での事故発生率の減少につながっていることが推測されます。

表2. 保育所と家庭で起きる事故の違い

事故内容	自宅群	保育所群	幼稚園群	計
打撲	82 (42%)	25 (48%)	29 (85%)	136 (48%)
誤飲	75 (38%)	10 (19%)	0 (0%)	85 (30%)
熱傷	24 (12%)	10 (19%)	0 (0%)	34 (12%)
刺傷・切傷	7 (4%)	4 (8%)	3 (9%)	14 (5%)
骨折	6 (3%)	2 (4%)	2 (6%)	10 (4%)
溺水	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (0%)
咬傷	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (0%)
ガス吸引	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)	1 (0%)
計	196(100%)	52(100%)	34(100%)	282(100%)

出典：長村敏夫他：自宅保育児と集団保育時における病院受診事故の発生件数の比較・チャイルドヘルス 5（8）：2002年

3. 保育所での取り組みを家庭で活かしてもらうには

家庭での事故を予防していくためには、子どもの成長発達の過程に応じて遭遇しやすい事故の理解を保護者に対して促していくことが重要です。インターネットやテレビなど情報源が多い近年では、たくさんの情報を得ることができる反面、その情報を自ら取捨選択しなければならないが故に正しい情報を得ることができず、結果として情報不足に陥ってしまうことも少なくありません。子どもの成長発達の様子を見極めて活動を展開することは、保育士が得意とする領域です。保護者の最も近い所に存在する保育士が、保護者にとって信頼できる情報発信源となり、正しい情報の提供と事故防止意識の啓発を行っていくことが大切です。（田中浩二）

参考文献

1) 厚生統計協会「国民衛生の動向・厚生指標」第57巻第9号、2010年
2) 厚生労働省：保育施設における死亡事例について、2009、<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000002yx5.html>
3) 厚生労働省：保育施設における事故報告集計、2011、<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000101kr.html>
4) 長村敏夫他：自宅保育児と集団保育児における病院受診事故の発生件数の比較～保育環境が事故発生頻度に与える影響について～、チャイルドヘルス 5（8）、607-610、2002
5) 長村敏夫他：保育環境の違いが未就学児の病院受診事故の発生頻度に及ぼす影響について、小児科診療 65（8）：1326-1330、2002
6) Frederick P. Rivara, Carolyn DiGuiseppi, et al：Risk of injury to children less than 5 years of age in day care versus home care settings. Pediatrics 84：1011-1-16、1989
7) Schwebel DC, Brezaussek CM, Belsky J：Does time spent in child care influence risk for unintentional injury?. J Pediatr Psychol 31(2):184-93、2006
8) 石井博子他：園での不慮の事故の現状①保育園での事故の現状とリスクマネジメント、チャイルドヘルス 9（1）：4-8、2006



● 編集委員

山中龍宏 緑園こどもクリニック 院長／独立行政法人産業技術総合研究所
デジタルヒューマン工学研究センター 傷害予防工学研究チーム
掛札逸美 NPO 法人保育の安全研究・教育センター 代表理事／心理学博士
久野順子 つくしんぼ保育園 理事長・園長／日本保育士協会 前会長
田中浩二 東京成徳短期大学幼児教育科 准教授／社会福祉法人のあ保育園 副園長
松田妙子 NPO 法人せたがや子育てネット 代表／NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事

● 監修

〈子どもの事故予防〉

山中龍宏 緑園こどもクリニック 院長／独立行政法人産業技術総合研究所
デジタルヒューマン工学研究センター 傷害予防工学研究チーム

〈子どもの発達〉

寺田清美 東京成徳短期大学幼児教育科 教授

● 参考文献・参考資料

「乳幼児の発達別 起こりやすい事故早見シート」山中龍宏 監修（母子保健事業団）
「子どもの事故予防と応急手当マニュアル」山中龍宏 指導（母子保健事業団）
「イラスト版子どもの事故予防—子どもを守る46の生活の知恵」山中龍宏 監修（合同出版）
「乳幼児の事故予防 保育者のためのリスク・マネジメント」掛札逸美 著（ぎょうせい）
「4歳児までの事故回避ガイド『あぶないよ！気をつけようね』」牧田栄子 監修（世田谷区・NPO 法人せたがや子育てネット）
「発達がわかれば 子どもが見える—0歳から就学までの目からウロコの保育実践」田中真介 監修（ぎょうせい）
「子育て支援 ひだまり通信 遊びとしつけの上手なコツ」高山静子 著（チャイルド本社）



子どもの育ちと安全がわかる！子育て安心カード

発行：初版第1刷 2011年8月1日 初版第2刷 2012年8月1日 第2版第1刷 2014年5月1日

編集・発行／社会福祉法人 日本保育協会

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-1

電話 03(3486) 4420（研修部研修課直通） FAX 03(3486) 4415 <http://www.nippo.or.jp>

制作スタッフ

デザイン／草薙伸行 イラスト／山口まく 印刷制作／兼俊亮

印刷／明文社印刷株式会社 編集制作／木村明子

この「〈子育て安心カード〉」および「〈子育て安心カード〉園内研修資料」一式は、非営利目的に限り利用できます。ただし、無料配布、あるいは、オリジナル誌面をそのまま「コピー」する場合に限られ、内容改変、加工、部分使用、変型、要約、翻訳、脚色、翻案など一切認められません。イラストの部分コピー使用も一切禁止します。なお、取り組みに活用する場合の「研修レジメ」などには、必ず、「子どもの育ちと安全がわかる！〈子育て安心カード〉：所収」と転記願います。

